

ソーシャルワーク

● ソーシャルワークとは

ソーシャルワーク専門職のグローバル定義（2014年）によると、ソーシャルワークとは専門職であるだけでなく、実践基盤の学問である。さらにソーシャルワーク専門職は、社会正義、人権、集団的責任、多様性尊重の諸原理を基盤に、社会や個人をよりよい方向へ変えていくために多様に働きかけていく。今後は多様性がさらに注目されていくであろう。

ソーシャルワークの構成要素には、①クライアント、②ニーズ、③ソーシャルワーカー、④社会資源がある。ソーシャルワーカーは、地域で生活するクライアントの多様な生活ニーズを充足させるために、クライアントと社会資源の関係に働きかけていく。社会資源は社会に多種多様に存在している。専門機関等のフォーマルな要素だけでなく、家族や友人等のインフォーマルな要素も重要になる。クライアントの生活支援に向けて社会資源を活用するところに、カウンセリングと異なるソーシャルワーク実践の特徴がある。

ソーシャルワークの体系化へ導いたリッチモンド（Richmond, M. E.）の定義（1922年）の骨格に「①人と環境、②個別的に、③意識的調整、④パーソナリティの発達」がある¹⁾。特に、人と環境に目を向ける視点は、今日のソーシャルワーク実践にも生き続けている。個人の生活状況については身体的側面だけでなく、心理的・社会的側面からも捉える必要がある。環境とは、クライアントの日常生活を取り巻く環境だけでなく、広く社会環境や自然環境も含めた生活環境を意味している。ソーシャルワーカーは、クライアント個人へ直接的に働きかけるとともに、社会資源や環境を活用しながら間接的にも働きかけ、これらを調整・統合化させていく。つまり、ソーシャルワーカーは人と環境、さらにその関係にも介入し、クライアントが抱える生活問題に向きあい、解決を図っていく（図1）。

● ソーシャルワークの援助の原理

ソーシャルワークの援助の基本原理は、人間としての尊厳を重視する価値を保持し、個人の生活状況の特殊性をくみ取り、潜在的にもつ問題解決能力（コンピテンス）を信じて引き出し、そこから専門的な援助の関係性とプロセスを築いていくところにある。

バイスティック（Biestek, F. P.）は、援助関係の概念はいかなる人間も価値と尊厳をもつことを大前提に、クライアントに対して、①個人として捉える、②感情の表出を大切にす、③援助者は自分の感情を自覚する、④受け止める、⑤一方的に非難しない、⑥自己決定を尊重する、⑦秘密を保持する、の7つの社会福祉における個別援助の原則を挙げている²⁾。

岡村重夫は、社会福祉的援助の原理として、①社会性の原理、②全体性の原理、③主体性の原理、④現実性の原理を挙げ、社会関係の主体的側面という生活当事者の視点に立つことの重要性を唱える³⁾。一人のクライアントがもつ生活史を把握し、「生活の背景」と「人生の歩み」という生活の全体からクライアントを理解していくことである。

ジェネラリスト・ソーシャルワーク

ソーシャルワークは転換期を迎えている。これまでは戦後の福祉六法体制をそのまま受け継ぎ、タテ割り・法的枠組みに基づく「課題別」「対象者別」の対応を続けてきた。しかし今日の社会では、①社会・家族・個人、生活や価値観、生活課題も多様化している。②ソーシャルワーカーが向きあう課題には多面的要因があり、深刻化している。③戦後に構築された社会の基礎構造にはほころびが目立つようになっている。こうした状況において個人の生活支援には、多職種チームによる総合的・包括的な相談援助が必要になってきた。

クライアントの生活場面である地域を基盤として生活支援を展開していくためには「①クライアントの生活の側から援助を組み立てていくこと、②住民当事者の主体を尊重したソーシャルワーク実践をすること」が求められる。こうしたソーシャルワークの基本視点は、すでにリッチモンドが「共通基盤」として明言していたが、その後のソーシャルワークは各時代や社会を象徴する科学や理論に揺すぶられつつ、多様なモデルやアプローチが提唱されてきた。

ソーシャルワーク実践モデルでは、精神医学の影響を受けた医学モデルから、人と環境の関係から個人の生活に焦点化する生活モデルへ、さらにクライアントの強さや長所に焦点をあてるストレングスモデルへ変遷を遂げてきた(図2)。ジェネラリスト・ソーシャルワークは、人と環境の相互作用に焦点化する生活モデルを中核に据え、各領域に貫通するソーシャルワークの共通基盤を明らかにし、クライアントに適する各モデルの強みを生かしながら、地域における当事者主体の生活支援につなげていく。このように現代社会においては、個人や社会の多様性に向きあい、個人の生活支援を実践していくために、多様なモデルやアプローチは統合化され、ソーシャルワークの本質を見直す機会にもなっている。

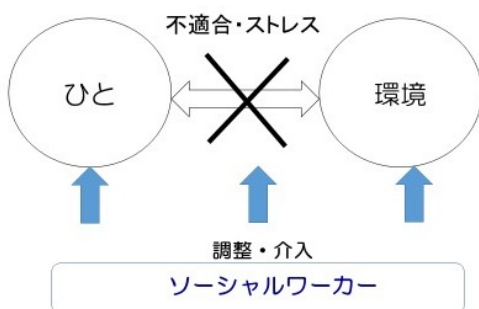


図1 ソーシャルワーカーのとらえ方

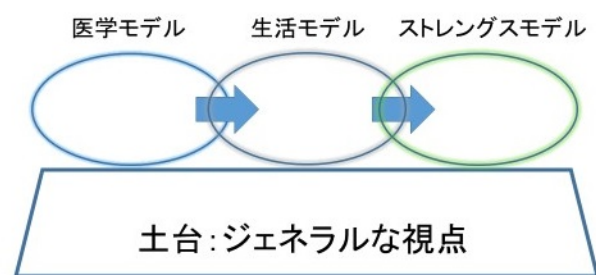


図2 実践モデルの相互関係 <ミクロレベルにおいて>

文献

- 1) Richmond, M. E.: What Is Social Case Work? Russell Sage Foundation, 1922 小松源助訳: ソーシャル・ケース・ワークとは何か. 中央法規出版, 1991
- 2) Biestek, F. P.: The Casework Relationship, Loyola University Press, 1957 尾崎新, 福田俊子, 原田和幸訳: ケースワークの原則. 誠信書房, 1996
- 3) 岡村重夫: 社会福祉原論. 全国社会福祉協議会, 1983

(梓川 一)